
下剋上姫

度辺 彩番

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下剋上姫

【Zコード】

Z6738Z

【作者名】

度辺 彩番

【あらすじ】

不登校だった姫野歴亜。だがテストの日いきなり登校を開始する。歴亜の『戦部門』のテストは生徒同士での戦い。『戦部門』で最下位の歴亜のテストと同時に姫野歴亜の下剋上が始まる…！

下剋上の始まりだッ！！

アタシ姫野歴亜は今日テストの口から登校を開始する。

廊下に貼つてある白いテープを無視して木でできた古くもろいドアを蹴りあける。ドアは大きな音を立て粉碎した。生徒は「お前誰?」似たいな顔でアタシを見ている。

「姫野か?」

「はい。そうですが、何か文句ありますか?でもあつても無くても口は開かないでください。口臭いです。」

「なつ！」

自分の席に座ると顔を伏せる。

「今日はテストだ。この『戦部門』は生徒同士の戦いだ。さあ、全員自分の装備を持って私についてきなさい。」

口開くなと言つたのに。

アタシは自分の装備品日本刀を持つていく。
そしてあの口が臭い先生についていく。

あの先生加齢臭もすごいぜ。

会場に着くとみんなあわただしく動き出す。

アタシも自分に用意された椅子に座る。

そして放送部による放送がかかる。

『みなさん着席してください。これより戦部門のテストを始めます。まず教頭先生ルール説明をお願いします。』

校長じゃないんだ。

『これからルール説明を行います。よく聞きましょう。まずテストは生徒の一対一です。どちらかがギブアップした時点でテスト終了となります。武器は一人3つまで。他の人が手出しした場合した者は即退学です。これでルール説明を終わります。』

『教頭先生有難うございました。次に前回の第一位の敬原強瀬さんに意気込みをお聞きします。お願いします。』

へー。そいつが前回の一位か…。

『強瀬だ。意気込みの前に宣戦布告をせてもいい。おい今日いきなりきた姫野歴亞、お前をぶつたおす。ドア壊すなっての処理する係俺なんだよね。無いと思つたからこの係にしたつて言つたのによー！もうこれ 자체が意気込んだ！決勝戦で待つ！－！』

自業自得だろ。まあ、少し楽しみだ。

『有難うございました。では一回戦を開始します。姫野歴亞さんと河野可憐さんスタジアムへ来てください。』

このテストと同時にアタシの下剋上の始まりだ。

一回戦～竹切りの舞～

『 いじで生徒紹介をします。まず、前回5位の河野可憐さん。彼女の武器は鎌のようですね。接近戦が得意のようです。』
放送部の紹介つて結構参考になる。
まあ自分の情報も漏れるんだけどね。

けどアタシは今まで不登校あまり情報が無いはず。
これはラッキーだ。

『 次に姫野歴亞さん。彼女は今日まで一度も登校してきていません。なので今回のテストで実力が分かります。』
これはいいハンデをもらつた。けど全力は出さずに行いつ。これで少しは情報が漏れてしまつからね

「ヘーハンデもらいくぎーって感じ?まあ可憐に問題なし……よし!小野!!」

可憐とかいう人がそつと上から鎌が可憐の真ん前に降つてきた。
なんで!?

「なんでつて顔ね。今可憐に鎌を渡してくれたのは
今のは渡したつて言わないって。

「可憐のこと!。ちなみ可憐の使い。美人で可愛いんだから。」
使いつて…。

「まあいいわ。始めましょ。」

ピーッ! つと開始の笛が鳴る。

それと同時に相手が田の前から消える。

「さつさとかたづけてあげる。感謝してね?歴亞ちゃん?」

相手はアタシの真上。思いつき鎌を振つてくれる。
鎌の動きが鈍い。これくらいなら受け止められる。

自分の日本刀で受ける。

「驚いた!歴亞ちゃんやるじゃん。けど可憐は負けないよ?」

「ちゃんを付けるな気持ち悪い。」

あ…。本音でちやつた。

「へー。可憐本人前にそんなこと言つちやつていいの？可憐本当に本氣出しちゃうよ？」

「ああ。さつさと本氣を出せ。」

「そういつた瞬間相手はうつむいた。

「俺は負けないよ？あはは？」

「こいつ多重人格かッ！」

相手はそつと顔を上げる。少し強気な顔になつてゐる。

「ボーッとしてつと負けるぜ？」

ブンブン鎌を振りまわしてくる。

きつと適当に振り回してゐるせいがどう来るか予想ができない。

「ほらほら。」

どうしようか。後ろに回るか。

「後ろから攻撃する気？あまいよー！」

思考を読まれていたか。

「じゃあ。技を出すのみ！」

「へー。楽しみー。あー！」

「貫け日本刀技『竹切り舞』ツー！」

竹を切る素振りでまず強力な風をおおおこす。それを何度も繰り返しやる。

「なに！？日本刀使いのこランクの技だと！最下位のお前がなぜ使える！」

「なぜ…？はは。」

それは…

「負けたくないっていう強い意志かな？」

思いつきり日本刀を相手に向かつて竹を切るように振る。日本刀は相手の体に。

「そういうことか。わかつたような気がするよ。可憐の負けギブアップだよ。」

審判から笛の合図が出る。

一回戦はアタシの勝ちだ。

一回戦へ絶対に負けたくない

『なんと一回戦は未経験者姫野歴亜の勝ち……これは期待できます。

』
これで負けたら下剋上も何も無いからな。

『次の歴亜さんの対戦相手が決まりました。』

ちなみにテストはこのホールだけが会場ではなく学校全体を使って行われているらしい。

だから次々対戦しなければならない。

『次の対戦相手は北山レイさんです。』

よし行くか。

『北山レイさんは前回ワーストランク2位。歴亜さんがいなかつたので今回の戦いは分かりませんね。北山さんがさつき勝つたのは50位。下剋上と語りに相応しい戦いでした。』

下剋上ね…

『でわ一回戦開始です！』

ピーーーッ！と笛が鳴る。

「貴方が歴亜さん…」

なんかじつと見てくる。

「何か用？早くおわらせるわよ？」

「はい。負けません。覚悟してください。僕はこのテストで下剋上をします。ここで負けたりはしません。」

「そうか。あいにくアタシもだ。だから負ける気ない。」

相手の武器はチーンソー。また接近戦になりそうだ。

「いきますッ！…」

こっちに全力で向かってきている。

「光れ！そして力を『えよ』シャインストーンズ』ツ…！」

チーンソーから大きな光る石が出てそれをチーンソー砕きそれがこっちに向かってくる。

アタシはそれを一つ一つ避ける。

「あまいです！僕の技はこんなもんじゃありません！」

壁にぶつかって落ちたはずの石がまた光りまたこっちに向かってくれる。

「まさか！」

「さあ僕の勝ちです！！！」

「ま…」

「え？」

「まけたくない！！『竹切り舞』ツ！！」

強い風を起こし相手に切りかかる。

「うわあああああ！」

相手は壁まで強い風により飛ばされる。

その隙に刀を相手に向かって振り下ろす。

「ツ！」

相手はヒューンソーで刀を受け止めていた。

「僕も絶対に負けたくないんです！僕は…僕は…必ず勝ちます！！！
え――い――！」

相手はいつきにかかる。絶対負けたくないという氣い持ちが伝わってくる。

でもアタシもぜえええええつた負けない！

こっちもいつきにかかる。

刀を竹を切るように振る。相手の顔に血が垂れる。

相手の攻撃で足から血が出る。痛い。だけど痛みより楽しさが増してくる。

思いつきりお互い武器を振い勝ちたいといつ気持ちをぶつけ合つ。

「やつ――！」

「それつ――！」

こんなの久しぶり。だからこそ負けられない。

「光れ！そして力を与えよ『シャインストーンズ』ツ――！」

「貫け日本刀技『竹切り舞』ツ――！」

お互いの技がぶつかり合つ。

「「いけ——————っ！」」

同時に砂ぼこりが立ち爆発を起こす。
少したつて。砂ぼこりらおさまる。

ドサッ！

相手が倒れる。

「ああ——。負けちゃったかな？キミの勝ちだよ。勝ちたかった
な……。キミの実力ほうが上だつた。ギブアップだよ。楽しかつたよ。
有難う。」

「じちうじや。」

お互い最高の笑顔を見せあつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6738z/>

下剣上姫

2011年12月25日16時49分発行